

青少年育成センターだより

第一七三号 十二月一五日 発行

連絡先

青少年育成センター

0835(23)3013

みなさんは、はなわほきいち「塙保己一」という名を聞かれた方はいらっしゃいますか。

保己一の壮絶な人生を紹介しましょう。

一意専心

・生家は裕福な農家だったが、五歳の時、思いがけない病魔に襲われる。目が次第に光を失っていったのだ。

母きよは保己一を背負い、片道八キロの道を一日も欠かさず

藤岡（現・群馬県藤岡市）の医師のもとに通い続けた。

なんとしても我が子の目を治したい一念だった。

しかし、保己一は七歳で完全に失明した。

さらに、十二歳で最愛の母が亡くなってしまふ。

保己一は杖を頼りに毎日墓地に行き、母の墓石に向かって泣き続けた。

涙の中で一つの決意が生まれた。

江戸に出て学問で身を立てよう。

保己一は、耳にしたことはすべて記憶するほどの抜群の記憶力の持ち主だったのである。

保己一の情熱は父を動かした。

絹商人に手を引かれ、保己一は江戸に旅立つ。十五歳だった。

江戸時代、盲人の進む道は限られていた。

検校という役職者に率いられた盲人一座に入り、按摩や鍼灸の修行をする、琵琶や三味線の芸能に勤しむ、あるいは座頭金という金貸しの知識を学ぶ、などして世渡りの技能を身につけ、互いに助け合って生活していく仕組みになっていた。選べる職業はそれだけだった。

保己一もまた雨富須賀一検校の盲人一座に入門した。

だが、保己一の望みは学問である。

悶々とした日々が続く、思い切って師匠の雨富検校に本心を明かす。

「私は学問がしたいのです」破門覚悟の告白だった。

保己一の幸運はこの雨富検校に出会ったことだった。

「人間、本心からやりたいことに打ち込むのは結構なことだ」と検校は言い、

学問することを許されたのである。

保己一の目覚ましい研鑽が始まる。

目が見えない保己一は誰かに本を読んでもらうしかない。

全身を耳にし、耳にしたことはすべて身につけていく。

盲人の身で学問に励む少年がいる、とたちまち江戸の町の評判になった。

保己一の真剣な姿に多くの援助者が現れる。

保己一はついに当代随一と謳われる国学者賀茂真淵の門人になることができた。

残念ながらその半年後に真淵は亡くなるが、その半年間に保己一は

六国史（「日本書紀」をはじめとする日本の六つの正史）を読破、後の偉業を築く土台となった。

六国史に記載されているのは九世紀の光孝天皇まで。以降は日本の歴史として整理されていない。

後の世の人ため、宇多天皇以降の歴史をきちんとした形で残さねば、と

保己一は「史料」と大文献集「群書類従」の編纂の決意する。

「群書類従」編纂の取り組みが始まったのは安永八（一七七九）年。保己一、三十四歳。

「群書類従」に収める文献は厳選に厳選を重ね、徹底的に校訂を加えた。

例えば「竹取物語」も5種類の異本を丹念に調べ、綿密に校訂している。

まがい物は絶対に収めない。それが保己一の信念だった。

六百六十六冊、全五百三十巻。

国学の金字塔「群書類従」が完成した時、保己一は七十四歳になっていた。その二年後に死去する。

昭和十二年、保己一の偉業を顕彰する。

「温古学会」を訪れたヘレンケラーはこう言ったという。

「小さい頃、私は母に励まされた。日本には幼い時に失明し、

点字もない時代に努力して学問を積み、

一流の学者になった塙保己一という人がいた。あなたも塙先生を手本に頑張りなさい」……

（「心に響く小さな物語Ⅲ」 致知出版社）

一意専心・・・他に心を向けず、そのことのみ心に心を用いること・・・

ヘレンケラーについては、多くの皆さんがご存知のことでしょう。大変な努力をすることで、生まれながらの障害を克服し、亡くなった今も障害を抱える人に勇気と元気を与え続けている人です。そのヘレンケラーが手本にした人が日本にいたということは日本人である私たちにとって、とても誇らしいことです。

この冬休みを利用して、読書で偉人に触れさせる機会をつくりましょう。子どもの考え方や行動が変わるかもしれませんよ。きっと成長のきっかけになることでしょう。